

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## A study of young Herbart during his stay in Switzerland : Jacobi or Spioza

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2000-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉山, 精一, Sugiyama, Seiichi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1436">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1436</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# スイス時代のヘルバルト

— ヤコービカスピノザか —

杉 山 精 一

## 1. 旅 立 ち

1797年3月25日、四台の馬車が連なってイエナを出発した。フィヒテを中心に活動した学生集団である「自由人協会」（以下「協会」と略記）の多くのメンバーが、あるものはパリへ、あるものはスイスへ、自らの進むべき道を求めてイエナを後にしたのである。それは初期フィヒテ知識学の影響を最初に受けた若者たちの新たな知的活動の始まりであった。

総勢11名にもなるこのメンバーの中にヘルバルトと母親もいた。ヘルバルトは家庭教師としてベルンへ、母親はオルデンプルクへ帰郷するためである<sup>(1)</sup>。このベルン滞在中、彼は知識学を克服する新たな自我論を意識しながら教育への関心を深め、その後その成果をペスタロッチーに関する論文として発表する。友人たちとのさまざまな交流の中で思索を重ねたベルン滞在は、まさにヘルバルトの思想形成の胎動期である。

だが他方で、ヘルバルトがスイスに滞在した二年半（1797-1799）は、ドイツ観念論の系譜を形成するシェリングやヘーゲルにとっても、カントもしくはフィヒテを批判的に乗り越えてゆく理論的な準備期間でもあった。

彼らの旅立ちと入れかわるようベルンを去ったヘーゲルは、ヘルバルトが『ペスタロッチーの直観のABCの理念』を出版した1802年、『信仰と知』においてカント、ヤコービ、フィヒテを批判し、絶対者を認識する理性の立場を明らかにする。1798年10月イエナ大学に赴任したシェリングは、絶対的

自我をめぐる次第にフィヒテとの対立を深め、やはり1802年フィヒテと訣別する。一方フィヒテは1799年3月、無神論の疑いをかけられ7月にイエナを去り、1800年『人間の使命』で新たな知識学を展開する。さらに言えば、1795年フィヒテの知識学を聞いたヘルダーリングが、精神の深い闇へ陥っていく兆候を見せ始めるのも1802年のことである。

彼らはいくくもこのとき、それぞれの立場は異なりながらも横一線に並ぶことになる。ではその胎動期である1790年代後半、スイス時代のヘルバルトが受け継いだ課題とは何だったのだろうか。

18世紀末のイエナ。そこはゲーテ、シラー、シュレーゲルが華麗な文学活動を展開し、哲学においてもラインホルト、フィヒテがカント以後の新たな哲学<sup>(2)</sup>に向け踏み出した知の中心地であった。そこには様々な才能に恵まれた若き俊才が集い、議論し、友情を深めながら、自らの進むべき道を模索していた。

この時期のヘルバルトの友人の名をあげてみよう。ヒュルゼン、シュテック、ムアベック、ベーレンドルフ、エッシェン、シュミット、グリース、ベルガー、フィッシャー、リスト、ケッペン。彼らは友情においてひとつではあったが、哲学においては別々の道を模索し続け、ヘルバルトに影響を与えてゆく。あるものはシェリング、ヤコービに共感し、あるものは志なかばで倒れる。彼らのその後の歩みもまた、ヘルバルト、シェリング、ヘーゲルの歩みと重なる。

年長のヒュルゼンは、ヘルバルトにシェリング研究のきっかけを与えた人物であり、シェリングやシュライエルマッハーと親交を深める。ベルンとともに哲学研究に打ち込むシュテックと後に詩人となるグリースは、旅の途中でハンブルクに立ち寄り、「協会」のメンバーに影響を与えたヤコービを訪問している。

2年後の1799年6月、グリースは無神論論争のさなかにフィヒテに送られたヤコービの書簡の写しをヘルバルトに送り、ヤコービに共感する。またこ

の頃グリースやベルガーは、イエナに赴任したシェリングとも交流を深め自然哲学の影響を受け、一方シュテックやフィッシャーとともにスイスでの研究仲間であったムアベックとベーレンドルフは、ヘルダーリンやジンクレアとの交流を深めていく。錯綜する交友関係を注意深く見ると、彼らはこの時期どこかでひとつにつながっているように見える。

ヘルバルト、シェリング、ヘーゲルのみならず、1790年代を共有した彼らが向き合ったものとはいったい何だったのだろうか。

このときカントからフィヒテに至る思想家群像の中で、彼らに影響を与えた共通の人物がいる。ヤコービである。個人の内面的な感情を思弁よりも優位におく彼の立場は、1800年以降に展開される彼らの哲学的立場を読み解くひとつの指標となる。シェリングとヘーゲルは、汎神論論争を引き起こしたヤコービを経由してスピノザを知り、ヤコービではなく批判されたスピノザに共感しながら、彼らの進むべき道を予感する。

またヤコービの与えた影響はスピノザを支点に、シェリングやヘーゲルとは逆向きの形で「協会」のメンバーに影響を与えている。ヘルバルトがシェリングの背後にスピノザの影を読みとり、これを同列の系譜として位置づけ批判した最初の哲学論文は、スピノザの与えた影響の二つの方向を裏付けている。1790年代、彼らはヤコービを介して真理を予感する「思弁（Spekulation）と感情（Gefühl）」のはざままで揺れ続ける。

本論文では、1790年代後半の友人たちとの交流の中で浮かび上がるヤコービを基点に、スイス滞在期のヘルバルトが確保しようとした哲学的立場を、いわば外から位置づけ若干の問題提起を試みたい。

## 2. 「自由人協会」とヤコービ

### (1) シュテックとグリースのヤコービ訪問（1797年4月29日～5月2日）

ヤコービが「協会」のメンバーに影響を与えていたことを示す象徴的なできごとが、グリースとシュテックのヤコービ訪問である。すでにヤコービと

面識のあったグリースの提案であつたろう。<sup>(3)</sup> 彼らはイエナを旅立った後、グリースの故郷であるハンプルクに滞在していたヤコービを訪問する。慣れ親しんだ作者を初めて目の前にしたシュテックは、同じベルン出身の友人フィッシャーにその印象をこう書いている。<sup>(4)</sup>

「おお！ゲーテともヴィーラントとも全く違う、大いなる存在が私の前にいると思いました。…この人物は、（私たちが読んだ）作家というよりもそれ以上の偉大な人物です。…いや、これ以上言葉で説明することはできません。」<sup>(5)</sup>

すでに1780年代の汎神論論争で一躍有名になっていたヤコービは、哲学史上では体系的な哲学者としてではなくカント、フィヒテ、シェリングらとの論争によってその存在感を際立たせている。彼が一貫して崩さない姿勢は、人間の存在を理性的な論理によってすべて汲みつくし、論じようとする立場への批判である。

三人の話はフィヒテ、ラインホルト、シェリング、ヒュルゼンにまで及び、ヤコービはシュテックにこう語りかける。

「理論の真理、それが人間のすべてを汲み尽くすことについて、私はどうしても納得できないのです。」<sup>(6)</sup>

したがって理性の限界を指摘しながらも、不可知的な領域にまで理性を拡大しようと試みたカント、あらゆる現象を絶対的の自我のもとに見るフィヒテ、絶対者を認識する理性の立場に立つシェリングやヘーゲルは、その批判の視野に収まることになる。<sup>(7)</sup>

彼にとって神もしくは真理なるものは、認識によって媒介される知の外にあり、それはただ個人の主観的感情（信仰）によって直接とらえられるものであった。その立場から見れば、あらゆる事物の根底に無限実体を見るスピノザの汎神論は、感情や時間性といった人間の属性を絶対的な無限性へと埋没させてしまうものと映る。彼はあくまでも有限なる人間の自覚の上に踏みとどまりながら、その直接的な主観的感情のうちに無限なる神との出会いを

求めたのである。

汎神論論争、そして純粹理性に対して直接的な感情の優位を主張することでポスト・カントの一角を担ったヤコービの問題提起は、宗教的には神は人間の主観的な感情のうちに求められるのか、それともスピノザの無限実体の内に求められるのかという問題であった。

だが他方でこの問題は、何ものにも制約されない知の絶対性を有限な人間がいかに認識できるのかという哲学の課題として引き継がれる<sup>(8)</sup>。この系譜にフィヒテ、シェリング、ヘーゲル、そしてヘルバルトと友人たちがいる。

人はあくまでも有限なる個としての主観的な感情に踏みとどまりながら、ヤコービのように「予感」「憧憬」という直接的な感情の内で無限なるものに出会うのか、それともそれはスピノザの無限実体のごとく普遍的な学の内でも認識できるのか。1790年代後半、彼らはこの分岐点に立っていた。

## (2) グリースの書簡 —ヤコービのフィヒテ批判—

ヤコービを訪問したシュテックとその報告を受けたフィッシャーは、ヘルバルトのスイス時代の研究仲間である。おそらくシュテックのヤコービ訪問は、ヘルバルトにもすぐ伝わったであろう。

この訪問の約一年前(1796年6月)に、ヘルバルトはベルガーがヤコービニズムを脱したことをシュミットに報告しており、ヤコービをめぐる議論はすでにこの時期彼の視野に入っている。さらにこの訪問直後の6月、シュミットがベルンを訪ねたとき、ムアベックとヘルバルトは、ヤコービをめぐる哲学的な議論を交わしている。

大学時代からヘルバルトのスイス滞在期に至るまで、ヤコービをめぐる話題は常に彼らの哲学的モチーフを刺激し続けている。「協会」におけるヤコービをめぐる議論の最終章は、グリースがヘルバルトに送った書簡である。

1799年3月、ヤコービは無神論の疑いをかけられていたフィヒテに書簡を送り、その知識学を「無」から「無」への無限の運動であるとし、ニヒリズム

ムであると批判する<sup>(9)</sup>。グリースはこの書簡の重要性に気づいたのであろう。フィヒテに頼んで写しをとり、それをヘルバルトに送ったのである。ヤコービはフィヒテとの相違点を次のように述べている。

「私たち二人は、すなわち同じような真剣さと熱意で、あらゆる学においてただひとつのもの……知識の学が完全になるよう望んでいます。ただあなたと私には違いがあります。あなたが、あらゆる真理の根拠が知識の学の内にあることを示そうとするのに対して、私はこの根拠である真なるものそれ自体が、必然的に学の外にあることを明らかにしようとするのです。…なぜなら、私は真理（Wahrheit）と真なるもの（das Wahre）とを区別するからです。」<sup>(10)</sup>

人間にとって真なるもの（das Wahre）は、学の体系の内にある真理（Wahrheit）の外にあり、それは人間の主観的な感情によって確信するほかないというのがヤコービの立場であった。さらにヤコービは知識学を毛織り靴下の比喻で揶揄している。

できあがっている靴下がどんなに色鮮やかで美しくても、これを逆に解いてみればすべては毛糸の絡み合いに過ぎない。フィヒテの絶対的自我は「毛糸という自我」と「針棒という非我」の間を「指という構想力」が働いてできあがっているのであって、解いてみれば「毛糸」だけが残って針棒からも指からも何も生まれてはおらず「無」であったことがわかるというのである。<sup>(11)</sup> 解体作業を通して自我の外には何もなくなることで絶対的自我が「無」であることが示されるとき、ヤコービはフィヒテの知識学を「ニヒリズム」と呼ぶのである。

ここにはヤコービが汎神論論争で展開したスピノザ批判と同じ文脈がある。ヤコービにとってフィヒテの知識学は、無限実体という客体をただ絶対的自我という主体に入れ替えたスピノザ主義にはかならなかったのである。

グリースは「論理的熱狂の不毛さからは、決して自分を高めることはできませんでした」<sup>(12)</sup>と語り、ヘルバルトが未だ感情を排した無味乾燥な知の世界

に身を置いていることを嘆きながらこうつぶやいている。

「ああ親愛なる友よ、素晴らしい力と豊かさが住みつき、あなたの心の奥底に分け入っていくようなこの感情をあなたに吹き込むことができれば。でもああ！あなたはそれを知ろうともしません。」<sup>(13)</sup>

グリースはヤコービの書簡を通じて、知の無限性という岸辺で「無限というサイコロゲーム」<sup>(14)</sup>に興じ、あたかも「経験的なかわりもなしに現実に向かおうとしている」<sup>(15)</sup>ヘルバルトに、人間の現存在に直接関わる感情の重要性に目を向けさせようとしたのである。<sup>(16)</sup>

### 3. ヤコービカスピノザカ

#### (1) 軌跡 ―ヘルバルトとヤコービ―

では「無限のサイコロゲームに興じている」とグリースに評されたヘルバルトは、はたしてシェリング同様にスピノザ主義者だったのだろうか。それともヤコービのように、感情を思弁よりも優位においたのだろうか。

彼の軌跡をたどってみよう。友人たちとの交流で、はじめてヤコービの名前が登場するのは1796年6月のシュミットあての書簡である。ここでヘルバルトは、ベルガーの言葉を借りて次のように書いている。

「ヤコービニズムのベールがとり払われました。彼（ベルガー）は、「人間性はなお時間を有する」ということを発見しました。」<sup>(17)</sup>

7月30日には、シュミットに自分の哲学的探求がフィヒテとは異なる道を歩んでいること、シェリング研究を試みようと思っていることを報告している。二ヶ月後の9月には「スピノザとシェリング」という短い哲学論文を仕上げ、その内容をリストに報告しながら、書簡の最後でヤコービに触れて次のように書いている。

「ヤコービのきわめて興味深い哲学的論文についても、私は研究を始めました。そしてとても参考になるものを見い出しました。」<sup>(18)</sup>

このとき彼が読んだヤコービの書物は、おそらく『信についてのデーヴィ



ド・ヒューム、あるいは観念論と実在論 (David Hume über den Glauben oder Idealismus und Realismus)』(1787)である。彼はこの書簡から三ヶ月後に仕上げたシェリング研究の論文で、絶対的自我と時間との関係に触れヤコービの参照を指示している。<sup>(19)</sup>

シェリングを批判的に検討した論文で、ヤコービを指示することが何を意味するかは明らかであろう。彼は徹底したイデアリズムを突き進むシェリングの絶対的自我に共感しなかったのである。もちろんその先にはフィヒテがいる。イエナ時代の彼は、「知に絶対的な全体性を確保することは不可能である<sup>(20)</sup>」と述べ、シェリングの思考過程に疑問を投げかけている。

「…この神(スピノザの無限実体)はまさに絶対的自我そのものであり、自己自身を考える神である。そして人々がこの神の思考を断念するとすぐに、個々の事物の概念、そして概念をもつ事物そのものは全く存在しなくなる。この事物の思考は、それどころか全く意味のないものになる。<sup>(21)</sup>」

ヘルバルトにとってシェリングの絶対的自我は、「客体の現実性を破棄してしまう<sup>(22)</sup>」ものにほかならなかった。ここで示唆されている立場は、その後シェリングやヘーゲルがたどった思考過程とは正反対の、まさにヤコービに近いことは明らかであろう。シェリングとヘーゲルがヤコービを介してスピノザ主義者になったのに対して、それとは逆にヘルバルトはスピノザではなくその対極にいたイギリス経験論、懐疑論の影響をヤコービから受けたのである。

## (2) 感情と思弁 — 「空虚な思考」の回避 —

シェリング論文から約1年後、家庭教師としてスイスにいたヘルバルトは、友人のムアベックとヤコービについて議論している。後に哲学教授になり、ヤコービ、ヘルダーリンのみならず、シェリングやヘーゲルとも親しく交流したムアベックは、1797年7月28日そのときの議論を回想し次のようにヘルバルトに書き送っている。

「私は今日散歩に行きました。そしてあなたが…ヤコービについて語ったことを突然思い出しました。…この二つ（思弁と感情）はひとつであるはずですが。けれどもこの争いが行われる場所では、この優先を誰にさせるのでしょうか？感情の中ではすべての人間性が語られ、思弁の中では思想のみが語られます。…ヤコービは彼の思弁を真理とみなしました。彼の場合は感情が優勢でした。彼はここでは悟性を感情から引き離さなければなりません。人々が彼を批判するすべては、彼の思弁が今なお彼が登り続けている山の頂上に達していないということです。彼がそれを分離したのは、おそらく真理が彼の前でその光を失ってしまうことがあったからです。」<sup>(23)</sup>

ここには当時彼らが向き合っていた問題が、ヤコービの問題を通じて凝縮した形で示されている。思弁と感情、それは真理を前にしてどのような場を確保できるのか。ムアベックはヤコービの理論がまだ未成熟であることに共感しながら、ベルガー、ヒュルゼン、フィヒテ、ヘルバルトがそれぞれ異なる立場に立ちながらも、もしこの問題の「核心を示し」それを「実現する」ことができれば「それが最初の英知となるだろう」と述べている。<sup>(24)</sup>

こうしたシェリング研究、さらにヤコービをめぐる友人たちとの議論を経て、1798年1月28日、彼は自らの進むべき研究について次のように書いている。

「私が探求してきたこの哲学の欲求において私が沈黙しているのは、ここで見出した偉大な自然のせいでも研究のせいでもありません。そこに至る入り口を見つけたと信じているからです。…私は理論と感覚によって人間の心情を研究すべきなのです。」<sup>(25)</sup>（傍線筆者）

「理論と感覚」とは、ムアベックと議論した「思弁と感情」にほかならない。この図式は、そのまま「スピノザ→フィヒテ→シェリング＝思弁」と「ヤコービ＝感情」に相応している。シェリングの思弁をつきつめてゆけば、その知は「概念と呼べるものではなく」、「感覚の媒介物」を必要としない認

識を認めざるを得ない<sup>(26)</sup>。けれどもヤコービを受け入れることは、ムアベックが語ったように「山の頂上に達していない」理論的な「弱さ」<sup>(27)</sup>を受け入れることになる。

スイス革命の動乱でフランス軍の侵攻におびえ「もしものときには、すぐに山岳地帯へと出発する」<sup>(28)</sup>ことを覚悟しながら、この直後の2月から、「肉体を失ってしまったかと思える」<sup>(29)</sup>ほど、彼は数学研究に打ち込んでいく。その成果は、8月終わりに完成した論文「最初に問題となる知識学の構想」<sup>(30)</sup>に凝縮されている。

「我々は…自我というものをひとつのものとして、そして多くのものとして同時に考えてみよう。我々はまず反省によって定立されたものを、その所産として与える限りで自我をひとつのものとするのであり、反省がとり扱う多様なものを自我に再び見いだそうと望む限り、自我を多くのものとする。単一性の中の多様性は量なのである。もし我々が多様なもの、質料を断念するとすれば、そのときこの量は意味のない空虚な形式となるであろう。というのも、ただ反省によって生まれる所産は、空虚な思考である。」<sup>(31)</sup>

ヤコービと同様にフィヒテの知識学に空虚な世界を見たヘルバルトは、自我活動に単一性と多様性を想定することで、空虚な思考からの回避を試みる。それはヤコービが確信した主観的感情が、自我のうちにどのようなプロセスを経て成立するかを明らかにすることで、思弁と感情にひとつの通路を見いだそうとするものであった。

したがってこの論文は、質料を持ち単一性と多様性をもつ自我の表象活動が、どのようなプロセスを経て確固たる「感情」を持つに至るかの分析で占められている。つまりこの論文で示されている構想は、これまでの経緯を見れば二つの意味を持っている。ひとつはこれによって、ヤコービが指摘した「無」あるいは「ニヒリズム」の批判を回避し、個としての人間の感情を絶対的な無限性に埋没させることなく学の領域として確保すること。さらにこ

のプロセスを明らかにすることで、思弁と感情の双方に足場をおいた新たな知識学の構築を試みることである。彼は次のように述べている。

「この自我の単一性によって自我は「ひとつの」行為であり、継続し、「ひとつ」の行為として新しくなっていく。……自我に表象を与え、現実的な生起をもつ（多様な）自我の結びつきは、感覚世界における自我の実効性を示している。我々が求められる結びつきとは、経験を確認することである。<sup>(32)</sup>」

だがここでひとつの課題が残されることになる。単一性と多様性を持ち、「感情の交替」から「多様な思考」<sup>(33)</sup>へと自在に変貌していく自我は、この論文で繰り返し強調されているように「時間性」「継続性」「持続性」そして「偶然性」という属性を持つことになる。ではこのとき自我は、どのような「持続的な外的要因」<sup>(34)</sup>によってひとつにまとめられ、「経験を確認」し、確固たる意志の領域へと導かれていくのだろうか。

この時点でヘルバルトとペスタロッチーとの物理的な、そして理論的な距離はさほど遠くはない。なぜなら多様な自我活動を、単一性へと向かわせる〈持続的な注意力〉を維持する端緒と方法こそ、「直観」と「教授」であったからである。<sup>(35)</sup>ヘルバルトがブルクドルフでペスタロッチーの授業を参観するのはこの論文を書いた1年後、フィヒテに自己の哲学的立場を報告し、<sup>(36)</sup>グリースの書簡を受けとった直後の1799年夏頃のことである。

#### 4. おわりに —1790年代の意味するもの—

友人たちとの交流で触れておきたい人物がいる。ベルンでの研究仲間であり、ヘルバルトにシュタイガー家の家庭教師を紹介したルドルフ・フィッシャーである。おそらく旅の途中でのザルツマンの教育施設の訪問、ブルクドルフでのペスタロッチーの授業参観には彼の存在が大きく影響していたに違いない。

というのも、彼はシュタッパーの秘書、ザルツマンの門弟であり、またペ

スタロッチーがブルクドルフで実践するきっかけを作った人物だからである。<sup>(37)</sup>おそらく彼との出会いがなければ、ヘルバルトと教育の関係も、また違った形になっていただろう。まさに彼こそは、ヘルバルトと教育を直接結びつけた人物である。だが彼はヘルバルトのペスタロッチー研究の成果を見ることなく、ヘルバルトがスイスを離れた直後に世を去る。

スイスで議論を続けたベーレンドルフとムアベックは、ヘルバルトのベルン滞在中にホンブルクでヘルダーリンとジンクレアとの交流を深め、ヘルバルトから届いた書簡を二人に見せている。ヘルダーリンはそれを見て「すばらしい人間に違いない」と共感し、一度語り合いたいと言っている。<sup>(38)</sup>

ヘルバルトと同様に初期フィヒテ知識学の影響を受けたヘルダーリンがはたして何に共感したのか、また彼らにその後どのような接触があったのかははっきりとはわからない。ただ1799年の初春、ヘルダーリンとジンクレアは絶対的の自我と格闘していたヘルバルトの存在を知っている。

また彼らの歩みを見るとき興味深い人物がいる。ケッペンである。ヘルバルトとともに「協会」に参加した彼は、ムアベックとヘルバルトがヤコービについて議論したとき、ベルンにいるヘルバルトをシュミットとともに訪ねている。

彼はその後一貫してヤコービ主義を貫き、『シェリングの理論あるいは絶対無の哲学の道 (Schelling's Lehre oder das Gange der Philosophie der absolute Nichts)』(1803)でヤコービの信仰哲学を弁護しながら、シェリングに対するヤコービの優位性を保持し続ける。<sup>(39)</sup>1819年ヤコービがこの世を去ったとき、残された著作を編集し世に出したのはケッペンである。彼のその後の歩みもまた、ヘルバルト、シェリング、ヘーゲルと重なる。ここにもヤコービが「協会」のメンバーに与えた影響を見ることができる。

1790年代後半、世紀の変わり目に新たな知の世界を開拓しようとした青年たちが向き合ったもの、それは無限なる神を前にして自らの有限性を問い、いかにしてそれを学の内にとらえることができるのかという問題であった。

それは何ものにも制約されることのない知の絶対性と、有限なる人間とのほごまで苦悩しつつ問い続けた時代の胎動期であったといえよう。

したがって彼らが論じた問題は単に哲学の問題だけではない。国家、法、自然、芸術、数学などあらゆる領域に及んでいる。それはムアベックとヘルバルトの議論で見たように、知の無限性（思弁）と人間の感情を足場に結ばれていた。そのひとつに当然のことながら「教育」の問題もあったのである。それは教育それ自体として独立して論じられていたわけではない。

事実ヘルバルトは、1798年6月両親あての書簡で、自分が関わっている子どもたちへの教育の最後は「国家学」であると述べている。<sup>(40)</sup>この意味では、本論文で指摘した思弁と感情をめぐるヤコービとの接点も、彼らが向き合った問題の一側面に過ぎない。

ただこの時期ヘルバルトが抱えた問題群（イデアリズムとリアリズム、有限と無限、神と人間、思弁と感情、ニヒリズム）を、その後の思想家たちもまた共有しているとすれば、1790年代はヘルバルトのみならず、我々が教育について考えていく重要な「場」を提供し続けているように思われる。<sup>(41)</sup>

#### （註）

引用及び参照したヘルバルトの論文は、すべて下記の全集による。またその末尾に略号（K）、巻数、頁数を示す。

J. Fr. Herbart's Sämtliche Werke, hrsg. v. K. Kehrbach, O. Flügel  
u. Th. Fritsch, 19Bde., Langensalza 1887-1912, 2 Neudruck Aalen 1989.

- (1) この「旅立ち」については、母親が詳しく報告している書簡がある。  
Vgl. K. 16-72.
- (2) 『一般文芸新聞』でシュレーゲルが活躍していることを書いている箇所がある。  
Vgl. K. 16-47. またゲーテやシラーに関して言及している箇所もあり、ヘルバルトは彼らと会っている。Vgl. K. 16-40.
- (3) グリースはライマルスを通じて、すでにヤコービと会っている。ライマルスは1795年に「協会」に参加しており、ヘルバルトとも大学時代に面識があった。

Vgl. K. 16-34.

- (4) ヤコービはスピノザ哲学を理解し、『ヴォルデマル (Woldemar)』(1779)『アルヴィルの手紙 (Aus Eduard Allwills Papieren)』(1775/6)といった哲学的かつ心理学的な小説を出版し注目されていた。これらの小説はヘルダーリンら当時の若者に読まれ、ドイツ初期ロマン主義の形成を促していく。  
海老澤善一訳「ヘーゲル著：ヘーゲル著作集 第三卷（について）（上）」『愛知大学 文学論叢』（愛知大学文学会）第88号 1988年，121頁以下参照。  
伊坂青司「有限と無限」『叢書ドイツ観念論との対話 第五卷 神と無』ミネルヴァ書房 1994年，103頁参照。  
シュテックも、二つの小説を読んでいて。ヤコービは『Woldemar』は売れたが『Allwill』が売れ残っていることを嘆いている。  
Vgl. Steck, Rudolf.: Ein Besuch bei Jacobi, in: Archiv für Geschichte der Philosophie, Bd. 12, 1899, S. 493ff.
- (5) この言葉は、当時の若者に与えていたヤコービの存在の大きさを伝えている。またこの印象は、後にヘーゲルがヤコービに会ったときの印象と一致する。海老澤善一訳，前掲論文，139頁以下参照。
- (6) ヤコービはラインホルト (Karl Bernhard Reinold, 1758-1825) を高く評価している。Vgl. Steck, Rudolf.: a. a. o, 496ff.
- (7) ヘーゲルとヤコービとの関係については、伊坂青司氏および海老澤善一氏の前掲論文から多くの示唆を得た。
- (8) 伊坂青司：前掲論文，81頁参照。
- (9) K. 16-111.
- (10) K. 16-107.
- (11) K. 16-108.
- (12) K. 16-106.
- (13) K. 16-105. またヘルバルトはグリースにニュートンや数学的定理などの自然科学の研究成果を書き送っているが、グリースはそれに全く興味を示していない。  
Vgl. K. 16-106.
- (14) K. 16-111.
- (15) K. 16-108.
- (16) グリースは、この書簡で次のように述べている。  
「神は私にとって詩と同じものです。」(K. 16-112) この言葉は「絶対的自我は神にほかなりません」と語ったシェリングと比較するとき、全く対極にあることがわかる。グリースは詩的な感情の内に神の存在を予感し、シェリングは学の体系の内に真なるものを予感したのである。ヘルバルトはグリースにヤコービの考えに批判的な書簡を送っているが残されていない。少なくとも「真理」と「真理なるもの」という区別については、ヘルバルトは同意しなかったようである。

- K. 16-115.
- (17) K. 16-26.
- (18) K. 16-37.
- (19) 時間について彼は次のように述べている。  
「時間は蓋然的なものである。すなわちそれは存在しないものとして定立されており、したがって時間は存在もせず、生成もしないのである。…(イデアリズムとリアリズムに関するヤコービを参照せよ)…けれどもこのあらゆる時間を排除して定立される存在は、はたして絶対的の自我における特徴としてふさわしいのであろうか。」 Vgl. K. 16-31.
- (20) K. 1-28.
- (21) K. 1-27.
- (22) K. 1-27.
- (23) K. 16-67.
- (24) K. 16-67.
- (25) K. 16-77.
- (26) K. 1-25
- (27) K. 16-121.
- (28) K. 16-77.
- (29) K. 16-81.
- (30) Erster problematischer Entwurf der Wissenlehre 1798, K. 16-96~110.
- (31) K. 1-97~98.
- (32) K. 1-101~102.
- (33) K. 1-102.
- (34) K. 16-85.
- (35) 後に1802年、ヘルバルトは『ベスタロッチーの直観のABCの理念』において、この<注意力>の重要性を繰り返し強調している。一部を紹介しよう。  
「注意力の緊張とその維持は、あらゆる教育の最も重要な課題である。  
K. 1-159.  
「教師はいつも、そして至る所で注意力の要因を求めているし、それを手に入れるように求めていくべきである。」 K. 1-164.  
「(教授)の道筋とは…その指示によって注意力の散漫を避け、注意力を呼び起こし、持続することを手に入れることである。」 K. 1-166. (傍線筆者)
- (36) K. 16-101~102.
- (37) 村井実『ベスタロッチーとその時代』玉川大学出版部1986年、151~152頁参照。
- (38) K. 19-108.
- (39) Köppen, Friedrich. in: Allgemeine Deutsche Biographie, Bd. 16. Berlin 1882/1969, S. 698ff.



(40) K. 16-89.

(41) たとえばディルタイが共感したのは1800年以降のヘーゲルではなく、まさにこの感情と思弁のはざまにいた青年ヘーゲルである。またその弟子であり、精神科学的教育学派を代表する W. フリッナーの学位論文は、この「自由人協会」でひとり異彩を放ち、ヘルバルトにシェリング研究のきっかけを与え、シュライエルマッハーとも交流のあったヒュルゼンである。

ディルタイ著/甘粕石介訳『青年時代のヘーゲル』名著刊行会 昭和51年。

Vgl. Flitner, Wilhelm.: August Ludwig Hülsen und der Bund der freien Männer, in: Wilhelm Flitner Gesammelte Schriften, Bd. 5, S. 15ff.